



「でんでんむしのかなしみ」を発表した頃（大学時代）

蜗牛的悲哀

新美南吉

（翻译萩田丽子）

从前，有一只蜗牛。

有一天，他忽然发现一件很重要的事：

“我背上的壳儿里充满悲哀！”这该怎么办呢？

他到朋友那里去，说：

“我活不下去了。”

朋友问：“你怎么了？”

他说：“我真不幸！我背上的壳儿里充满了悲哀。”

朋友说：

“你以为只有你是这样？我也一样呀！”

他有点儿失望，又去了另一个朋友那里。

另一个朋友也说：“别以为只有你是这样。

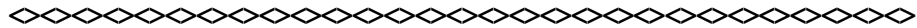
我也一样呀！”

于是，他又到别的朋友那里去了。

就这样，他问遍了所有的朋友，大家的回答都一样。

他终于明白，不只是他自己，谁都有悲哀。只有忍受才能活下去。

从那以后，蜗牛再也不叹息了。



新美南吉 1913年7月30日愛知県半田市生まれ。日本を代表する児童文学作家で発表作品の数は多く外国語にも多く訳されている。高校時代にすでに詩や童謡を書き始め、1932年には名作「ごんぎつね」を発表した。同年4月東京外国語学校（現東京外国語大学）に入学し、卒業後は一時期神田の貿易商会に勤めるが結核を患い帰郷する。快復してからは安城高等女学校（現安城高校）の教員となり英語や国語を教えていたが、1943年1月に病状が悪化し（喉頭結核）、3月22日に亡くなった。彼が4歳のときに実母が亡くなると父親は再婚したが、ずっとこの継母との折り合いが悪く、病状が悪化してからは孤独な闘病生活を送り最期を迎えたと言われている。

一ぴきのでんでんむしがありました。あるひ、そのでんでんむしは、たいへんなことに、きがつきました。

「わたしはいままで、うっかりしていたけれど、わたしのせなかのからのなかには、かなしみがいっぱい、つまっているではないか。」

このかなしみは、どうしたらよいでしょう。

でんでんむしは、おともだちのでんでんむしのところに、やってきました。

「わたしはもう、いきていられません。」

「なんですか。」

と、おともだちのでんでんむしはききました。「わたしは、なんという、ふしあわせなものでしょう。わたしのせなかのからのなかには、かなしみがいっぱい、つまっているのです。」

すると、おともだちのでんでんむしはいいました。

「あなたばかりではありません。わたしのせなかにもかなしみはいっぱいです。」

それじゃ、しかたがないとおもって、はじめのでんでんむしは、べつのおともだちのところへいきました。

すると、そのおともだちもいいました。

「あなたばかりじゃありません。わたしのせなかにも、かなしみはいっぱいです。」

そこで、はじめのでんでんむしは、またべつの、おともだちのところへいきました。

こうして、おともだちをじゅんじゅんにたずねていきましたが、どのともだちも、おなじことをいうのでありました。

とうとう、はじめのでんでんむしは、きがつきました。「かなしみはだれでももっているのだ。わたしばかりではないのだ。わたしは、わたしのかなしみを、こらえていかなきゃならない。」

そして、このでんでんむしは、もう、なげくのをやめたのであります。

.....

本文テキストは青空文庫（日本ペンクラブ電子文藝館編輯室）よりダウンロードし、歴史的かなづかいを現代かなづかいに改めたものです。